

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成26年 7月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士後期課程2年

氏名 橋本雄太

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	2014年度 デジタル・ヒューマニティーズ連合大会 (Digital Humanities 2014)		
発表題目	SMART-GS: An Approach to Image-based Digital Humanities		
開催場所	スイス・ローザンヌ大学		
渡航期間	平成26年 7月 6日 ~ 平成26年 7月13日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券チケット代	170,000円
		現地宿泊費	73,260円
現地交通費		6,740円	
当財団の助成について	欧州でも特に物価が高いスイスでの発表だったので、助成金の存在は非常に助けになりました。個人でこの金額を捻出することは難しかったです。また、助成金の振込が出張の一ヶ月前に行われたため、航空券やホテルの手配に際して個人で立替を行わずに済んだことも、学生の身としてはありがたい仕組みでした。		

成果の概要／橋本雄太

研究集会についての概要

Digital Humanities 2014 (DH 2014) は、デジタル・ヒューマニティズ分野の主要国際学会である Alliance of Digital Humanities (ADHO) によって主催された国際研究集会である。この研究集会は ADHO により毎年開催されており、本年度はスイスのローザンヌ大学およびスイス連邦工科大学ローザンヌ校 (EPFL) にて、7月7日から12日まで5日間にわたって開催された。デジタル・ヒューマニティズ、人文情報学を主題とした研究集会としては、DH カンファレンスは世界最大規模のものである。デジタル・ヒューマニティズ研究の興隆に伴って、近年は特に参加者が増加する傾向にあり、運営委員からは、本年度の来場者の数が 600 名を超したとのアナウンスがあった。

カンファレンスでは、人文科学に対する情報技術の応用に関する様々な研究が発表される。これには計量文献学やデジタル・アーカイブ論、また古文書のデジタル翻刻に関する研究などが含まれる。また、発表形式にはロングペーパー、ショートペーパーの読み上げ形式の他、パネルセッション、ポスター形式の発表が設けられている。

筆者の発表内容

DH2014 では、筆者は名古屋大学の久木田水生准教授と共同で「SMART-GS: An Approach to Image-based Digital Humanities」というタイトルのポスター発表を行った。SMART-GS とは、筆者の所属する京都大学文学研究科、情報・史料学専修で開発している歴史文献研究支援ソフトウェアである。SMART-GS は特に手書きの難読文献の研究を支援することを目的として設計されており、デジタル化された史料文献画像に対するマークアップ、マークアップ間のリンク作成、組み込み HTML エディタによる翻刻テキストの作成、画像類似度にもとづいた手書き文字検索といった機能をサポートする。

これまで SMART-GS は 6 つの歴史研究プロジェクトで手書き史料の翻刻ツールとして採用されてきた実績がある。代表的なプロジェクトとしては、現代史研究者の永井和京大教授によって主導された、明治～大正期の高級官僚である倉富勇一郎の日記の翻刻プロジェクトが挙げられる。

デジタル・ヒューマニティズ分野では、歴史文書の翻刻支援ツールはこれまでも数多く提案されてきた。そうした中で SMART-GS がユニークであるのは、

1. 古文書の電子アーカイブ作成ではなく、古文書を用いた**歴史研究**にフォーカスしている
2. ネットワークを介した複数人による共同翻刻をサポートする
3. 画像認識技術を利用した手書き文字検索機能をサポートする

といった点である。カンファレンス4日目(7月10日)に行われた筆者らのポスター発表においても、SMART-GS のコンセプトと機能を概説しつつ、上記ポイントを強調する構成をとった。また、ポスター掲示と並行して、PC2 台を用意して来場者に向けて SMART-GS のデモを行った。

来場者から得られた反応

当日のポスター発表会場は大変な盛況で、1時間設けられた発表時間の間、筆者らのポスターには 30 名以上の来訪者があった。SMART-GS 開発プロジェクトを国外の研究者にアピールする上では、十分な役割を果たすことができたことと筆者は考えている。

また、発表を通じて、SMART-GS の今後の開発に寄与する可能性のある知己も得ることができた。人文情報学研究所研究員の永崎研紀氏の紹介で、テルアビブ大学の Nachum Dershowitz 氏が筆者らのポスターを来訪してくれたのである。Dershowitz 氏は手書き文字の検索を研究しており、SMART-GS が手書き文字検索に利用している DSC サーチ (はこだて未

来大学寺沢憲吾准教授による開発) に特に興味を持った様子であった。Dershowitz 氏とは今後も連絡を交わすことを約束することができた。今後、研究上の協力を進めることができれば、氏が提案した検索アルゴリズムを SMART-GS に導入することも考えられる。

発表以外の場における交流

5日間の開催期間中、DH2014 ではバンケットやエクスカージョンなど、研究者同士の交流を促す様々なイベントが設けられている。こうした機会を通じて、幾人かの研究者の知己を得ることが出来た。例えば、Google Books や Internet Archive を包摂する大規模デジタル・アーカイブである HathiTrust プロジェクトの主要メンバーである Peter Organisciak 氏とは宿泊先も同じであり、氏の発表とは別に HathiTrust プロジェクトの技術的詳細について聴く機会を得ることができた。また、台湾・長庚大学でインダストリアルデザインの研究をしている Junbun Chen 教授とは夕食を共にし、研究内容についての情報交換を行うことができた。

DH2014 での研究発表を通じて、国内の研究集会では得られない情報交換の機会と、研究上の刺激を得ることができた。ただ、筆者の語学能力不足によって、他研究者とのコミュニケーションを十全に果たせなかった場面もあった。この点については十分に反省し、次回以降の参加の糧としたい。